佐屋路が通る橋

尾頭橋

名古屋都市センターの西、自動車がひっきりなしに通る国道19号交差点の南西に、小さな碑がひっそりと佇んでいる。ここが昔、佐屋と名古屋への分岐点であったことを表す佐屋路の碑だ。かつてはこの碑をながめて多くの人々が右へ左へと道を急いだところである。

佐屋路が東海道の脇街道として開かれたのは寛永11年（1634）。この時、佐屋、万場の二宿も立てられた。寛永13年には岩塚、正保4年（1647）には神守の宿が開かれて4駅となった。東海道をゆく旅人は、宮の宿から海路七里、桑名の宿に渡る。桑名までの7里の海路は、難渋をきわめるものであった。風雨が厳しい時には船を出すことができない。危険もある。船酔いをする人もいる。

くもる日の海をいとひて今朝漕ば
なみしづかなる佐屋の河舟

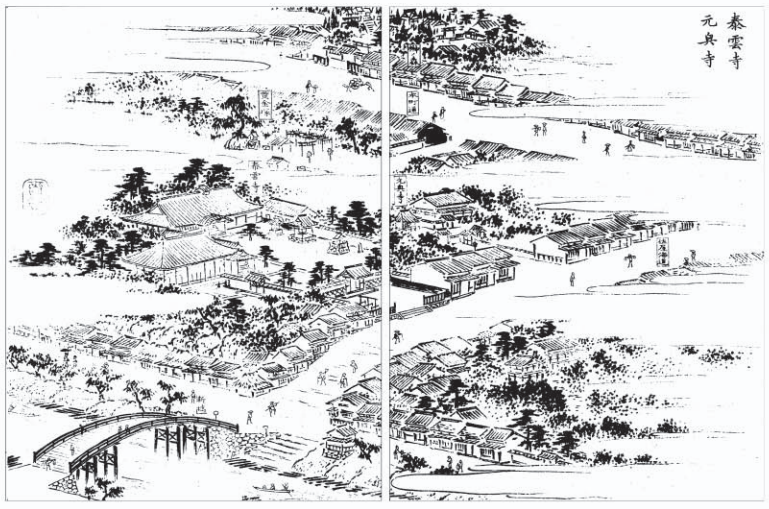
この冷泉為村卿の歌は、七里の渡しを避けて、脇街道の佐屋街道を多くの人々が通行した事情を詠んだ歌である。佐屋街道は熱田から佐屋までは陸路6里、佐屋から桑名までは、佐屋川、木曽川、鰻江川と川船で3里下った。

寛文6年（1666）、幕府の道中奉行が佐屋街道を管轄することとなった時、今の瓶屋橋付近を通っていた佐屋街道は、尾頭橋が架けられ岩塚に通ずるようになった。佐屋街道が尾頭新道、尾頭橋が新橋とも呼ばれるのは、このことがあってからである。

佐屋路の碑

時代はうつり、大正元年には、名古屋電気鉄道の尾頭橋駅ができ、柳橋から船方までの電車が運行されるようになった。さらに大正2年には、尾頭橋から下之一色電車が走るようになり、尾頭橋界隈は近郊からの買物客で賑わうようになった。

堀川に面して尾頭橋の際には、北側に材木商の関山、南側に中井がある。川人夫の家もある。中井材木店から、住吉神社までは崖になっている。



泰雲寺・元興寺（小治田之真清水：鶴舞中央図書館蔵）

沢上から住吉神社に向けて坂道を下ってゆくと、北側に金山神社があり、南へ少し入った所に畑中地蔵がある。境内に、小さな石碑が立っている。「七はしくやう」と達筆な字で彫られている。この碑は尾頭橋の際にあったものだ。それが道路拡張などのため、この地に移ってきた。

尾頭橋のあたりは、毎年雨季になると川は氾濫し、堤防は決壊し、橋は破壊され流失する被害をくり返していた。洪水のたびに村人は総がかりで橋を架け、堤防工事に従事した。ある年、一人の旅の僧が尾頭橋に通りかかり、村人からこの話を聞いて、自分がこの地に埋まり、万人の難渋を救おうとして人柱になることを申し出た。自ら人柱となった僧の霊力によって災害は絶え、その後、村人は安穏に暮らすことができるようになったという。

村人は、尾頭橋に僧を祀る堂宇を建立して、供養を毎年行なってきた。その後、堂宇は兵火にあって焼け落ち、修理をする人もいないままに歳月は流れていった。元文3年（1738）頃、人柱となった僧を祀る堂宇の消滅したことを悲しみ、魚屋伝吉は、供養塔を建立することを思いたった。

江戸時代、堀川には上流から五条橋、中橋、伝馬橋、納屋橋、日置橋、古渡橋、尾頭橋と7つの橋が架かっていた。魚屋伝吉は、自分の住んでいる尾頭橋だけでなく、名古屋の町を流れる7つの橋が流失しないことを祈願し、堀川が氾濫しないことを祈り、人柱となった僧を供養する塔をつくり、七はし供養塔と名づけた。

七はし供養碑

昭和10年代の尾頭橋（名古屋都市センター蔵）

尾頭橋付近、昭和初期の堀川（鶴舞中央図書館蔵）